

徳島県支部

徳島県における花き農家の現状と課題

日本の農業は、現在農業産出額が漸減傾向にある。花きについても同様な傾向がみられる。その要因についてはいろいろとあるが、国際競争力が弱く、輸入増をきたして、単価の下落から農業所得の低下につながっている。

徳島県は、京阪神の大消費地に近く、かつ比較的温暖な気候条件に恵まれており、従来から花き栽培が盛んで、県内各地で産地を形成していた。しかし、花博から17年が過ぎ、消費者の買い控え、景気動向の変動、近隣諸国からのなだれ的な花きの輸入増などに見舞われており、花き生産農家の経営状況は非常に苦しいのが現状である。さらに、昨今の原油高騰のあおりを食って、施設栽培での暖房費の高騰、農業資材の値上げなどでほとんど利益を確保できていない。

以上の俯瞰的な状況を具体的なデータとして把握すべく、全国及び徳島県における花きの生産状況、消費状況、輸入状況について調査した。特に、徳島県において出荷量が大きく、流通市場で大きなシェアを持っている品目について、実状の把握に努めた。

さらに、これらのシェア上位品目について、徳島県内の標準的な花き生産農家の生産コストについても、徳島県発行の「経営指標」（平成15年度版）から引用し、経営数値の実状と利益状況の実体を調査した。

また、徳島県内の数十軒の花き栽培農家にアンケート資料を配布して回収を試みたが、残念ながら2軒に留まった。そのうちの1軒の事例を紹介する。県内でも有数の花き生産農家であるが、暖房用重油の高騰から、農業所得の低下で経営状況が悪化してきているのが現実である。

厳しい経営状況のなかで、今後花き生産農家が生き残っていくためには、どういう方向で経営すればよいかについて、アウトライン的なガイダンス、徳島県農業研究所の花き担当の専門家、県内の花き卸売市場関係者の提言等について、経営改善のためのヒントを呈示した。

景気の上昇傾向による消費者の所得向上によって、花きの消費が上向きつつあり、また花きの輸出が少しずつではあるが増えている。それにともなって、花きの単価が反騰する兆しも見え始めている。

「花き経営」も結局、他の産業の「経営」と何ら変わることがないといえる。「自然」「植物」を扱うとはいえ、人間の知恵を働かせ、「経営者の利益確保」のために、「経営管理」の方策を尽くすことになる。本調査研究資料が、徳島県の花き農家の経営の一助になれば、幸いである。